

大学改革—改革の手順とノウハウ

—獨協大学における全学総合講座の実践—



伊藤爲一郎 獨協大学経済学部教授(前キャリアセンター所長)

1 21世紀委員会の設置

桑原学長(2000年4月～2004年3月)は、学長就任に際し「大学の理念として将来に向かって如何なる大学像を志向すべきか」ということを基本的モチーフとする「獨協大学21世紀委員会」(以下委員会)設置の提言を行った。

委員会最終答申(2001年3月30日)は21世紀初頭の社会状況を以下のように展望している。

①流動的で複雑化した不透明な時代、②地球規模での協調・共生と国際競争力が求められる時代、③少子高齢化時代の到来と産業構造・雇用形態の大きな変化の時代、④職業人の再教育など生涯学習需要の増大する時代、⑤豊かな未来を拓く学術研究の進展の時代。

2 獨協大学が目指す将来像

(1) 現状と課題

大学進学希望者の全入時代の予想を上回る早い到来は、大学進学希望者にも、また、社会にも魅力ある大学としてその存在価値をアピールできることを求められている。

高等教育の大衆化と少子化に直面した今、単に生き残りのための改革ではなく、大学教育の新しい局面を見据えた改革とする必要がある。

一方、近年の情報化社会の進展による新しい質の学生成成と、新しい授業形態の模索も求められている。

(2) 基本理念の再定義

獨協大学には「大学は学問を通じての人間形成の場である」とする建学の理念があるが、これを礎とし、

「21世紀の実社会に貢献しうる国際人の育成」を第一に掲げた。

情報化社会の進展は学生に、社会人としてバランスのとれた国際的教養と新世紀の情報テクノロジーの駆使を必須条件として求めている。

このため、深い自己理解と真の国際社会に通ずるグローバル・スタンダードを有し、合わせてプラクティカルな専門知識を備えた学生を輩出させるべく諸制度の改革を行う。

この点で「スペシャリストを養成するのか、あるいはジェネラリストを養成するのか」という命題については、二者択一的選択ではなく、その両者を兼ね備えた人材の育成を目指している。

このために編成されるカリキュラムは学部により重点が異なるが、「全学的なカリキュラム」の構成は、プラクティカルな専門性を習得するための専門教育を縦軸とすれば、横軸には「学際的综合教育」を置くこととする。

すなわち、本学の特色でもあり、また一定の社会的評価も得てきた国際性豊かな人材の育成、あるいは将来人類社会が直面する諸課題について地球環境、平和・人権、生活・健康、言語・情報・コミュニケーション、世界認識といった枠組みから実社会を俯瞰し、地球的課題の解決に向かって行動しうる力を与えることを主眼とする。

獨協大学はこの目標に向けて、(1)カリキュラム改革、(2)学習・教育・キャリア支援体制の充実、(3)施設設備の充実、(4)社会に向けての開放、以上4点を改革の視点とし、新たな獨協大学の創造を目指す。

3 基本理念の実現に向けて

(1) カリキュラム改革においては、以下のような4つのカテゴリーを視点とした改革が行われた。

- ① 各学部の専門領域を深く探求する「学部・学科科目」
- ② 社会で活躍できる資質を身につける「キャリア教育・資格講座」
- ③ 国際化・情報時代を生きるための「外国語習得・情報技術習得」
- ④ 目標設定、グローバル・スタンダードの修得を涵養する「導入教育・全学共通カリキュラム（クロス・カリキュラム）」

専門教育の独立尊重は他大学との比較競争において、実質的な競争に耐えうる学科専門教育の質的向上を意図する。また、各カリキュラム間の相互乗り入れも視野に入れた柔軟な運用を行う。

(2) 学習・教育・キャリア支援体制の充実では、教育重視の観点から、学部・学科・コースは学生の目標達成に向けてのガイドラインを策定し、総合的・系統的な履修プログラムをカリキュラム内教育あるいはカリキュラム外教育として用意する。さらにキャリア支援の核としてCareer Development Programme (CDP) 強化を図る。

4 教学内容の質的改善・教学内容を通じての理念の実現

獨協大学は「獨協大学が目指す将来像」に示される全学的な理念「21世紀の実社会に貢献しうる国際人の育成」を学内に明確にし、受験生（選択者）と社会（評価者）とに自らの理念とそれを実現するためのプログラムを提示しなければならない。それによって、ある意味では偏差値等にかかわらず、本学の理念に関心のある、やる気のある学生の選択を促し、社会的評価を獲得できるからである。

この理念の実現を支える最大の要素は教学内容である。「全学的カリキュラム」は、各学部・学科の教育目標に応じた独自のカリキュラムの総合であるが、同時に、それを超えて本学の理念実現に沿った形で全学的に推進すべきものである。

したがって、ここでは全学的規模で展開すべき要素

を取り出し、それらの将来的なあり方、その支援体制を提言する。これらの諸要素が学部カリキュラムの中で有効に機能しうるためにも、その意義と実行・支援体制が明確にされていなければならない。

5 カリキュラムの構成プログラム

下図で示されたカリキュラムの構成プログラムのなかで核となるのは学部・学科の専門科目であることはいうまでもないが、ここでのテーマと関連の深い、「導入教育・全学共通カリキュラム」・「キャリア教育・資格講座」をとりあげる。

(1) 「導入教育」

ここでいう導入教育は3つの課題を含んでいる。

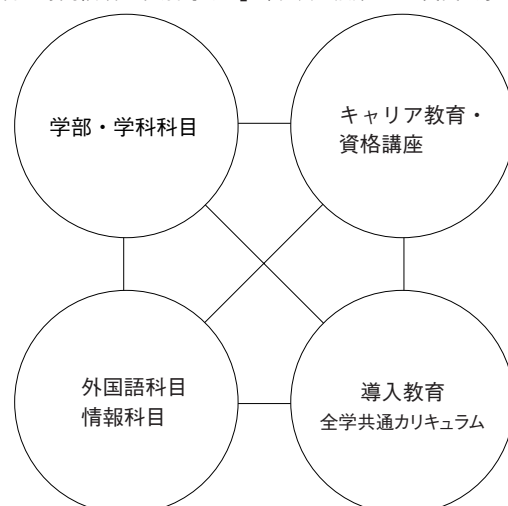
① 基礎力の養成

第1は基礎学力の養成である。大学以前の教育の質的变化により、特定分野での基礎的知識、技能の習得が十分なされていない時にそれを補う必要がある。いわば中等教育の補完的位置づけを担う必要がある。ことに重要であるのは大学での学習への参加の仕方を習得させることであり、そのために少人数の演習を設け、ノートの取り方、レポートの書き方、教室内でのコミュニケーションのとり方を教える必要がある。これは大学における学生の理解を助けひいては勉学意欲を喚起することとなる。

② 動機付け教育

第2は学部・学科の提供する教育への動機付けである。今後必ずしも明確な志望、学習目標、将来像を持ち得ず、漠然とした「外国語」「経済」「法律」といっ

「各学科の専門領域を深く探求する」「社会で活躍できる資質を身につける」



「国際化・情報時代を生きるための基礎を培い、学際的な視野をはぐくむ」

たイメージを結んでいるに過ぎない新入生に対する初期の動機付けである。したがって、専門内容についての導入的説明を行う科目の必要性は明らかである。

③ 大学生活への導入

これら2つの機能を超えて、「導入教育」はより広範に大学生活を送る際の素養を身につけさせる教育の端緒でなければならない。学内モラルに始まる学生生活全般の説明に始まり、入学後の早い段階から将来像を構想させる必要がある。

また学内の諸活動を通じて社会性を育成させ最終的には社会へと架橋する大学生活期間のキャリアアップの基礎と位置づけられる。

(2) 「全学共通カリキュラム(クロス・カリキュラム)」

次に「全学共通カリキュラム」はこの延長上にある。

① 実践的知識への転換と獲得

「全学共通カリキュラム」の第1の形態は、上記の「導入教育」科目を入学初期にあって学部・学科に限らず聴講し、専門教育の違いに限定されない学的方法や問題設定の学際性・共通性を学ぶことから始まる。

② 年次配当

学部・学科の専門的な学習をよりグローバルに広げ、実践的に理解を深める科目であるから、下学年の学生に配当するのみではなく、履修条件を組み合わせるなどして、上学年においても履修を促す。

③ 担当者

旧教養部のようにこれを専ら担当する教員を置かず、全学から担当者を出す。

④ 授業形式

積極的に学外の講師を招聘し、総合講座形式で複数の教員が担当する授業、複数の教員が同一のコマの中で協力をして授業を行うなど、授業方法の工夫と改善を行う。

⑤ 授業構成

授業科目は時代に即応して科目内容等を見直すことができるように柔軟に組織する。縦軸に「現代世界の課題」、横軸に「技術・方法論」を設定する。以下はその一例である。

「現代世界の課題」	「技術・方法論」
・平和・国際関係	・問題発見・問題解決
・人権と差別	・批判的・歴史的思考
・環境と開発	・学習・体験
・世界の諸地域	・調査・実験

- ・産業と社会
- ・外国語・情報技術
- ・現代生活と健康
- ・表現研究（日本語）
- ・言語と人間

こうして作成されたマトリックスのコマの一つ一つに具体的な科目を充てていくが、ここの科目名称は現代世界の課題に即したものとする。

(3) 「全学共通カリキュラム委員会」の設置

「全学共通カリキュラム」は、かつての「教養」概念、「教養部」教育とは異なっている。まずその差異と新たな意義が明確にされて実現される必要がある。専門教育のタイトな体系の中でステージアップを果たせず、体系の中で自らの関心を特定できない、あるいは動機付けの弱い学生が増えてきた時に、このカリキュラムこそが、彼らに身近で具体的かつ、近い将来に彼らの直面する問題を提起し、思考・想像を促し、討論に参加させることを通じて、大きく成長させる可能性を持つ。また広く社会に開放し、社会人も含めて実施していくにも適した内容であることは、言をまたない。

こうした「全学共通カリキュラム」の意義をより深め、魅力あるカリキュラムを作り出し全学的な調整と円滑な運営を行うために、教務委員会の下に「全学共通カリキュラム委員会」が設置される。

6 キャリア教育・資格講座

社会で活躍できる資質を身につけるための教育は、「社会に貢献できる国際人の育成」を実現していく上で、欠かせない要素である。そのような教育は、従来から、学部学科のカリキュラムにおいて、また、そのほかに大学が提供するプログラム等として学生に提供されてきた。今後も、キャリア教育・資格講座は、質的にも量的にもいっそうの充実・発展が求められる。キャリア教育はとりわけ①学生への動機付けに始まり、効果的なプログラムの提供、資格の取得や試験の合格にとどまらず、その先の具体的な就職までをも視野に入れ、また、②学部・学科のカリキュラム等と有機的関連性を保ちつつ、広範かつ体系的なシステムとして構築されていくことが望ましい。

全学総合講座が構想された背景と理念、概要を「21世紀委員会最終答申」に依拠しながら説明してきたが、「広い教養基盤の上に高い専門性を持った国際人の養

成」のために様々なプログラム・工夫がこらされている。

7 「キャンパスライフと仕事」

キャリアセンター（当時就職部）の責任者であった私も「キャンパスライフと仕事」という全学共通カリキュラム授業のコーディネーターとして参画することを考えた。就職戦線が目前になってはじめて就職を考える学生・視野が狭いがためにチャンスを失う学生・語学にこだわりすぎる学生、キャリアセンターを訪れるそんな学生たちを毎日のように見てきた。教室・演習等で、知的関心の薄い学生・基礎学力水準の低い学生と接触する機会が多くなってきていた。

このような学生たちに少しでも早く、できれば入学当初から将来どのように生きていくのか、どのような仕事をもって社会に貢献するのか、そのような問題意識を学生が持って、将来像を意識しながら充実したキャンパスライフを送らせるような新しいカリキュラムが作れないか検討に入った。

入学のできるだけ早い段階から将来の生き方・キャリアを意識させるのが第1の目標であり、全学総合講座を通じて学部学科科目の学習意欲向上に架橋することが第2の目標であった。

対象を主に新入生とした。労働問題の専門家である桑原学長をはじめ経済学部と同僚たちにも指導とアドバイスを受けた。講義内容の案を持って行き学長に相談に乗ってもらいと、学長からはもっともっと実用的なものにしたほうが良いというコメントをいただいた。今度はキャリアセンターの職員からアドバイスを受けて修正を重ねた。

仕事・職業を切り口に自分の未来の夢を描き、その目標に向かってキャンパスライフを豊富なものへと工夫する。そのようなキャリアデベロップメントを支援する授業科目（次頁表を参照）を手探りで始めたのが実情であった。学内の専門家には知恵を借りただけでなく、講義も担当をお願いしたが快く引き受けてもらえることとなったのでアカデミックな部分は骨格が固まった。キャリアセンターの職員・同窓会の協力を得て学外のバラエティーに富んだ講師陣もそろえる目途が立った。

一方で、全学共通カリキュラム委員会に対してキャ

リア支援の授業科目を単位付きですることが果たして可能であるのか相談に行った。講義の目標、内容、授業計画、講師陣等を決定して趣旨を説明した。幸い委員会の審査をパスして、春学期から日中のゴールデンタイムに全学総合講座「キャンパスライフと仕事」の開講が承認された。

2003年4月から「全学共通カリキュラム」が多くの困難を克服して発足した。キャリアデベロップメントと学習計画を意識的に考えるように誘導するカリキュラムを内容とする授業が認められた背景を考えてみると、委員会答申が出るまでに学部・学科の代表が委員会で議論をし、それを学部・学科に持ち帰ってさらに議論を重ね、問題点や疑問があればもう一度委員会で議論するというような長く慎重な審議の過程で「キャリア支援の重要性」が次第に理解されるようになったものと考えられる。

学長を先頭に大学全体を巻き込むような改革の議論が行われたからこそ前進できたのであろう。

できるだけ多くの学生に個性的な講師陣の講義を聞かせたいということで半期完結科目とした。新入生を中心に1年間約900人の学生が受講している。3年生の受講希望者が非常に増加してきたが別のメニューが求められているということであろう。充実したキャンパスライフを考えるきっかけを掴んでもらい、ひいては卒業後の将来も構想してもらえたら嬉しいことである。

学習意欲の低い学生・基礎学力の積み上げが必要な学生に、仕事あるいは職業観の育成を通して自分の将来と自分の属する学部学科の講義・演習との関係を意識させ、学習意欲をかきたてることができれば嬉しいことである。

第一志望の大学に落ちて入学以来半年ずっと泣き泣き獨協大学に来ていたという女子学生から、この授業に参加したお蔭で笑顔を取り戻し、キャンパスライフをエンジョイしています、という話を聞かせてもらって、こちらまで同じような楽しい気分となる。

全学総合講座は幸い学生たちに好評のようであるが、これは講師陣の熱意のこもった講義と有能な支援スタッフのお蔭であると感謝している。

全カリ（春・秋）	全学総合講座「キャンパスライフと仕事Ⅰ」	コーディネーター	伊藤爲一郎
講義目標		授業計画	
「生きる力」を強くすることがねらいです。「自分らしい生き方」を発見するにはどうしたらよいか考える時間です。国際競争の激化、情報化の進展、産業構造の変化など日本の経済・社会をとりまく環境の変貌によって、就職・雇用情勢は大きく変わり、大学に求められる人材についても変化が起きています。一方でせっかく就職したのに、3年以内に離職する若者が3割にも達するという結果が出ています。その主な理由は、学生の職業意識の未熟さにあります。就職という人生でもっとも重要な選択を適切に行うには冷静な「自己分析」が必要です。「キャンパスライフ」の内容が問われるのです。この講義は、皆さんが個性にあった生き方をデザインし充実した学生生活を送れるよう支援するものです。		第1回 オリエンテーション 講義の目的、進め方などの説明 第2回 企業で働く（企業が学生に求めるもの） 第3回 公共部門（教員・公務員・NPO）で働く 第4回 男女共同参画社会（男女共同参画社会を推進する） 第5回 労働市場と雇用はどのように変化してきたか。 第6回 ベンチャー企業を起業する 第7回 正社員とフリーター 第8回 仕事と適性（仕事をどのように選ぶか） 第9回 自己理解・自己表現 第10回 社会の求める人材とは 第11回 活躍するOB・OG 第12回 キャンパスライフと仕事 パネルディスカッションを予定 （講義の順番が変わることがあります）	
講義概要			
生きていくためには何かの仕事に就かなければなりません。どのような生き方をしたいかによって、選択する職業も違ってきます。どのような生き方が考えられるか、具体的な職業を例にとりながら多様な生き方があることを示します。選択のヒントを与えます。目標を達成するために何が必要か、その手順を実践的に考えてみます。目標を持ってキャンパスライフをおくるためのスキルを磨くことができるように工夫されています。			
受講生への要望			
将来どのように生きていくかイメージしてみましょう。最初はぼんやりとしたものしか浮かばないかもしれませんが、キャンパスライフの目標を見つけるために、辛抱して講義に出席しているとだんだんはっきりとしてくるでしょう。卒業時のはっきりとした将来像が楽しみです。			
評価方法			
レポートは必要に応じて提出してもらいます。レポートと出席状況（10回以上出席のこと）を総合して評価します。			
テキスト、参考文献			
テキストは使用しません。必要に応じて資料を配布します。講義の中で参考文献を紹介します。			